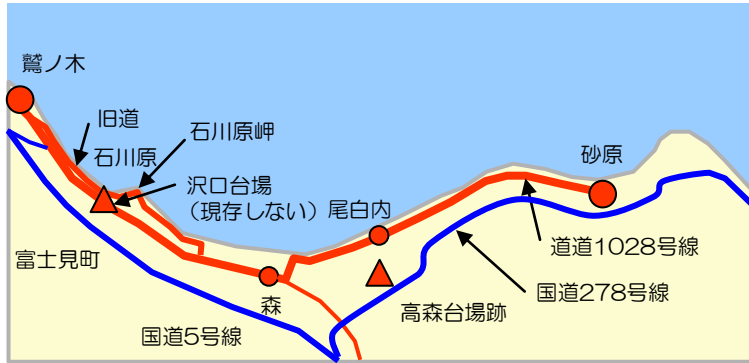
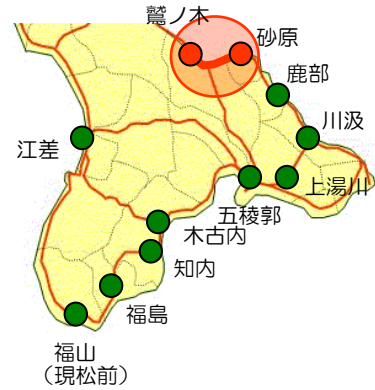


鷲ノ木～砂原の道



鷲ノ木～砂原の道



鷲ノ木から砂原に至る道を、明治初期の地図で見ると、鷲ノ木は1条の村で、村の中には万太郎川（現在も存在する）が流れる。村端から坂を登り、石川原岬の高台を越えて、鳥崎川を渡り森に入る。ここで道は2手に分かれる。地図の下に向かっての道は、箱館戦争の初戦となった、峠下に向かう道で、大鳥隊が通った道になる。

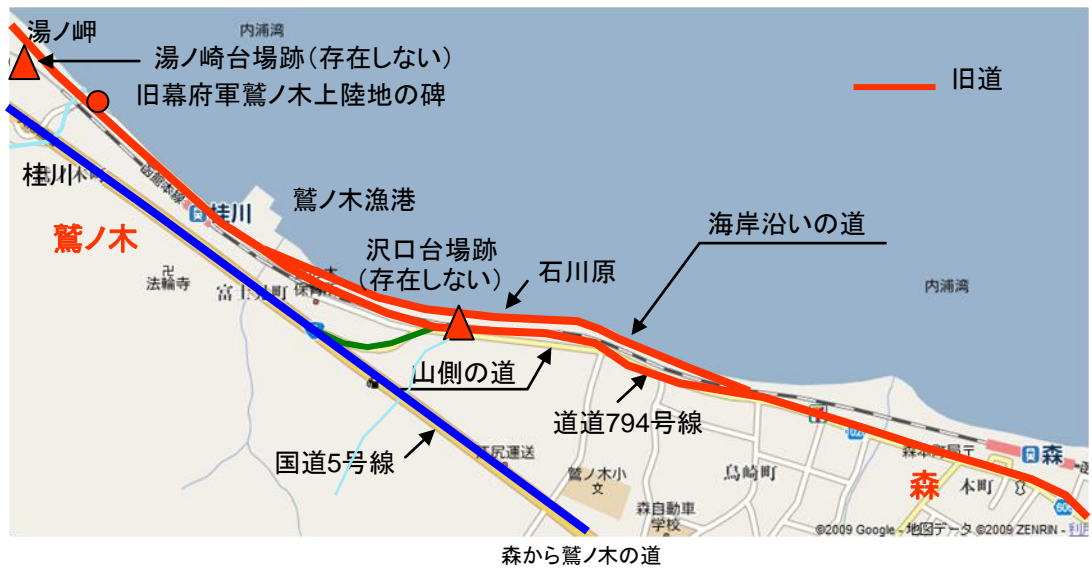


明治初期の鷲ノ木・砂原間道路

土方隊は森から内浦湾沿いの道を進攻した。尾白内・掛澗を進み砂原に宿陣する。この辺りの町名は平成の市町村合併で、すっかり変わってしまった。小石崎＝砂原西2丁目、場中＝砂原西3丁目、度杭崎＝砂原1丁目、紋兵エ砂原＝砂原2丁目、四軒町＝砂原3丁目、会所町＝砂原4丁目、沼尻＝砂原東3丁目など。古文書に出てくる地名が消されるのは寂しい限りだ。

森からの道は道道 1028 号線となり、全て舗装された道になっており、当時の面影を残すものは少ない。当時は海岸の波打ち際に近い所を歩いたのだが、今は護岸工事が行われたり、漁港が出来たりしたので、海岸線とはコンクリートで遮断されてしまった。曲りくねった道にのみ当時の面影が残っている。

鷺ノ木～森間の道



現在の鷺ノ木から森への道は、鷺ノ木の集落を過ぎて、緩い舗装路を登り、JRの踏切を越えて、駒ヶ岳や砂原岳が秀麗な姿を見せる、高台の富士見町に出て、そこを下って森町の市街地に至る。

当てもこの高台を通る道はあったが、線路が出来たのは、明治 36 年で、それ以前は集落の南端の方から、石川原岬に道があり、森に続いていたのであろう。

この石川原岬の高台は多くの旅人が歩いている。峠は道幅が狭く、夏はイタドリが視界を妨げ、うっそうとした道だったと、日記に書かれている。冬期は雪が積もった高台を越えなくてはならない。

又この高台の道の他に、海岸近くの小砂利や砂の浜道を通っている人もいた。石川原岬の下の海岸は石川原と言った。

石川原は、アイヌ語「インガラベ＝眺望の所の意」からきている。これがさらに訛まって「イシガワラ」となったのは、崖下から海岸にかけて石が多く、和人が「石川原」とした。寛政年間の紀行文には「石川原」の名が出てくるし、菅江真澄の「えそのでぶり」にも石川原の記述が出てくる。



左の絵は、幕吏目賀田が各地の沿岸を描いた鳥瞰図で安政 3～5 年に北海道・樺太を調査・測量をした時に書かれた「延叙歴検真図」の中の鷺ノ木村だが、左の集落は森村で近くには鳥崎川が流れている。右の川は万太郎川で右手に鷺ノ木村の集落がある。万太郎川と鳥崎川の間は高台になっているがここは沢口台場があった、石川原岬（現富士見町）であろう。下の海岸には家が見える。土方隊は高台を行ったのか、海岸を行ったのかは現時点では確認は出来ない。

日賀田帯刀 延叙歴検真図 鷺ノ木

高台の道については、松浦武四郎の安政3年（1858年）の日誌に、「村（鷲ノ木）の上より、少し野道を越えて

石川原岬から鳥崎川・・・」との文書がある。これは高台を歩いた記述であろう。

土方隊が進攻したのは冬だったのと、峠は積雪が30cmもあった。

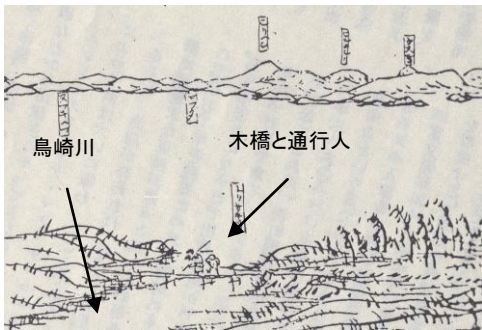
雪道のアップダウンの道は好まれる道では無かっただろう。そんな事から土方隊は海岸の波打ち際を進攻した可能性もある。

冬季は雪が少なく、アップダウンの少ない海岸沿いの道は多くの人が好んで歩いたし、海岸の道と山道の2つが存在し、状況によって道を使い分けている場所もある。

冬の海岸の道は海水で雪が溶かされているのと、平坦な道が多いので歩きやすい。早朝に歩けばまだ砂が凍っているので埋まる事も無く快適に歩ける。

波の高い時は、石川原の海岸が狭かったので、途中から高台に登って歩いた。

この高台には、旧幕府軍が新政府軍の進攻に備えて、この付近に作った3つの台場（湯ノ崎台場、沢口台場、高森台場）の内の一つとなる、沢口台場があった場所になる。



鳥崎川のご絵

高台の富士見町から下って行くと鳥崎川が出てくる。当時この川には小さな仮橋が架かっていた。

弱い橋のため、重量のある馬は川を渡渉した。川の両岸には水柳、赤揚が多く生息していた。

土方隊は相当量の弾薬と兵糧を持っていると思われるので、渡渉したのであろうが、厳冬の川を渡渉するのは厳しかつたに

違いない。それとも工作隊が仮橋を作ったのであろうか？

土方隊が峠越えの道か海岸の道の、どちらを進攻したかとの文章は残っていないので明確ではない。

天気の良い日は、海岸沿いの道を歩く事を薦める。雄大な駒ヶ岳や砂原岳を見ながら、海辺を歩くのは気持ちが良い。途中の石川原は今でも石がごろごろあるが、それ程歩きにくい場所では無い。

石の海岸を過ぎれば、やがて砂浜になり、足の裏には心地よい感覚が広がる。しばらく行くと水産加工場が出てくるが、その前を通り、少し行って右手のJRの高架をくぐれば、舗装された道道794号線に突き当たる。そこを左に曲がれば森市街地に入る。

石川原については古い地図や書物を探したら、鷲ノ木と森の間地点に石川や石川原、石川原岬の文字が出て来た。額兵隊隊長、星洵太郎の漢詩「渡海」には、砂原峰（砂原岳）の名が出るが、地元では



左は砂原岳、右は駒ヶ岳

駒ヶ岳が最も知名度もあり読まれる筈だ。連山になる砂原岳はそれ程の知名度は無い。

副総裁の松平太郎も愛馬に「駒ヶ岳」と名づけているくらいなので、普通であれば駒ヶ岳の嶺に月が・・・となる筈だ。

ところが実際に海岸を歩いて分かるが、石川（石川原）辺りからは砂原岳が見えるが、駒ヶ岳は右手の高台の影になり見えないのが分かる。それで砂原の峰となったのではないか。

この漢詩からも海岸線を歩いた事も考えられる。

森～砂原間の道



森から砂原への道

森から道が2手に分かれる。

箱館に向かう道は、先発隊と大鳥隊が進攻した道で、森からは宿野辺（現赤井川）～峠下を經由して五稜郭に至った。

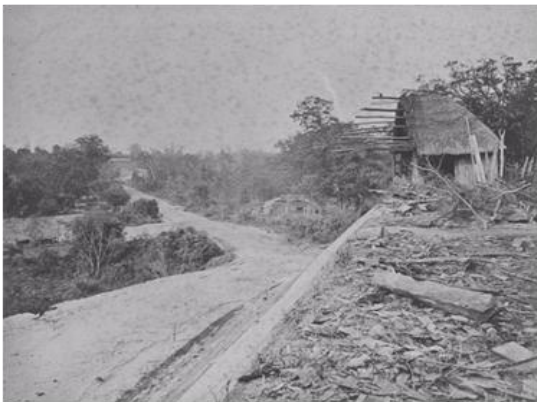
土方隊は森から砂原へ内浦湾の海岸線に沿って歩いた。当時は人工的な護岸や舟入潤もなく、小砂利と砂の海岸が続いていた。

星洵太郎の日記に「暁ヲ拂テ間道ノ兵鷲ノ木港を発し、宿野部、尾白内、砂原ヲ過ギテ砂原に着陣」と書かれている。

森から尾白内に行くのが一般的だが、宿野辺を經由しているのが気になる。森から函館に向かう途中の宿野辺に追分という地名があり、此処に茶屋があった。

この追分は、箱館方面から来ると分かれ道で、ここから森村方面と尾白内方面に、それぞれ行く事が出来た。

追分は森市街地から遠くも無いので、土方隊が海岸線を進み、額兵隊が森で分隊してこの追分を經由して、尾白内～砂原と進攻した可能性もある。



追分付近の道 明治5年

や砂原岳が見える。

額兵隊は川汲の一本木（現馬揚）や下湯川に進攻する際も、分隊して進攻している。常に敵がいる事を想定して、広範囲に道を進行しているのではないだろうか。

森から直接砂原へ行く道は海岸線に近い砂浜の道であったが、現在は漁港が出来たり、護岸工事でコンクリートの壁が出来たりして、海岸の波打ち際を歩くのは困難になった。歩くとすれば道道1028号線を歩くしかない。湾の対岸にはエトモ（室蘭）が見えるし、右手には雄大な駒ヶ岳

尾白内には保存状態の良い高森台場跡がある。ここは箱館戦争の史跡として一見の価値がある。押出、掛洞と漁村を進み、宿陣予定の砂原に到着する。

砂原は戸数124戸で、この辺りでは比較的大きい村だった。ここには南部藩砂原陣屋があり、30～50名の藩士が北方の警備にあたっていたが、戊辰戦争の戦火が東北にも及んだため、藩兵は陣屋（分屯

所) 内の家具などを壊して本国に引き上げた。

土方隊の宿陣場所は何処なのか不明だが、陣屋付近に泊まったという文書や、会所や民家に分散して、宿泊したとの文書がある。

駒ヶ岳は土方が進攻する 12 年前の安政 3 年 (1856) に大噴火をしている。鹿部方面には大きな被害が出たが、森・砂原方面は被害が少なかった。

明治 5 年の砂原付近の写真では、道幅が 5~6m もありそうな広い道が写っており、この様な道の状況なら 30cm の雪が積もっても何無く歩けただろう。



高森台場跡 (尾白内)



砂原付近の道 明治5年